

# 外国人留学生を支援する人々 Supporting foreign students

駒形 千夏

## 1. まえがき

平成25年から29年までの5年間を計画期間とする「第2期教育振興基本計画」においてグローバル人材に向けた取り組みの強化が基本政策のひとつに掲げられ、学生海外派遣の基盤整備の一環として日本学生支援機構による海外派遣奨学金制度が整えられてきた。それに後押しされ、日本の大学に在籍しながら在籍校が提供する交換留学や短期派遣制度を利用して留学する学生は、平成24年度の6万5,373人から27年度8万4,456人へと増加している。<sup>(注1)</sup> 数多くの学生が海外に渡航し外国の教育機関で学んでいるのであるが、そうした日本からの学生を受け入れる国や、在籍する教育機関の受け入れ支援状況はどのようになっているのであろうか。本稿ではまず留学生支援に関するイギリス、カナダ、オーストラリアの事例と、フランスにおける外国人支援の状況を概観する。次に、筆者自身が学生派遣に関わっているフランス・ナント市で、日本人を含む外国人学生支援を行う各種団体の代表に行った聞き取り調査を元に、外国人学生を支援する人々が何を目的にどのような活動を行なっているのか、活動を成立させている要因を探ってみたい。

## 2. 先行研究

大学における留学生支援では、イギリス、カナダ、およびオーストラリアの現状を調査し分析した先行研究がある。

高橋彩(2012)はイギリスにおける留学生支援の現場を調査し、イギリスが重視する「留学経験の質」を分析している。アメリカ合衆国に次いで多くの留学生を受け入れているイギリスでは、ブリティッシュ・カウンシルが中心となって戦略的に自国文化・教育の魅力を発信し、積極的な留学生誘致を行っている。1999年に当時のブレア首相が政府主導の留学生支援政策 Prime Minister's Initiative (PMI) を打ち出した。2006年から2011年の第2期PMIでは留学生受け入れ10万人増が掲げられ、個々の留学生の「留学経験の質」向上が、イギリスにとっても英国留学ブランドを高め、さらなる留学生の獲得につながるものとして注目された。大学では、教員以外の専門職員が留学生の受け入れ支援や関連サービスに従事しているが、留学生が特別ということではなく、全学の学生支援の一環と見なされている。学生は「顧客」、教育は「商品」であり、授業など狭義の教育の枠組みを超えて、進路選びから卒業後のフィードバックまで、学生経験全体を通じた教育空間のマネジメントが「留学経験の質」として議論されている。

Firkola, Peter (2012) はカナダの大学における留学生のためのキャリア支援に関する調査を行なっている。カナダ政府も1990年代より留学生の受け入れをビジネスチャンスと受け止めており、2000年代に入ると、優秀な留学生の獲得と不足する労働市場のための人材獲得を結びつけて戦略を立てている。大学でも、全学向けキャリア支援プログラムに留学生の利用を促したり、留学生向けに就職活動に必要な言語表現を習得できるようサポートプログラムを提供しているところもある。しかし課題もあり、サポートプログラム開設には人件費がかかるため、キャリア支援オプションによっては有料となる。また、留学生向けのインターンシップの受け入れ先を確保するのが難しい。過去に留学生とトラブルがあった企業は受け入れようとせず、逆に留学生が無償インターンシップをやりたがらない傾向がある。インターンシップを終えても、留学生は潜在的にビザの問題を抱えているので採用されにくいいため、留学生の就職を促すためには、法改正も必要であろうと結んでいる。

佐藤由利子 (2018) はオーストラリアの留学生支援事情を政府の方針とともに調査している。オーストラリア政府は留学生支援政策を、留学生のためだけでなく、外貨獲得、および国のブランド力を向上させ、外交や貿易を促進するための国家戦略として位置付け、2016年に「国際教育のための国家戦略2025」を発表した。戦略の3本柱のひとつである「基本の強化」の下で「可能な限り最高の学生経験の提供」が3つ目の重要事項としてリストアップされている。これは2013年に出された「グローバルに教育するオーストラリア (Australia Educating Globally)」と題する報告書の中で、2020年までに留学生数を30%増やすための方策が謳われ、その3番目が「留学生の有意義な経験」であったことと呼応する。留学生の留学経験の満足度をはかるために、隔年でオーストラリア政府は i-graduate に「学生バロメーター (Student Barometer)」調査を委託しており、ビザとキャリアに関して受けられる助言が他国と比較して満足度が低いという結果が出ている。そのため政府および教育関係機関は留学生の Employability (雇用され得る能力) を重要な課題と受け止め、オーストラリア国内だけでなく、留学生が帰国後や世界の労働市場で競争できるスキルの提供が重視され始めている<sup>(注2)</sup>。実際に留学生が学生生活を送っている各大学では、留学生の支援にあたる学内部署は個々の大学により様々であり、またメルボルン大学のように学生の自治組織が学生支援の主体となっている事例も報告されている。各大学ともに、学生支援に学生自身が主体的に参加することで学生エンゲージメントを高め、コミュニティの一員であるという主体者意識を持たせることでより良い留学経験につながることを期待されていると分析されている。

続けて留学生支援に限ったことではないが、フランスでの外国人に対する支援をまとめた先行事例をみていく。

西山教行 (2018) は外国人への公用語習得に対する支援状況を詳しく調査・分析している。外国人がフランスに移住し、フランス社会に統合するためには<sup>(注3)</sup>、フランス語は仕事を得るために必須の能力であり、言語教育は個人の言語権の保障ともいえるべき重要事項である。2000年以降、フランス教育行政は次々に行われた移民政策に関連して、成人移民の言語教育に国が積極的に関わるようになった。2003年から移民の「受入・統合契約」Contrat d'Accueil et d'Intégration (CAI) が導入され、政府

はフランス社会への移民の統合を支援し、就労支援とそのためフランス語研修を400時間まで無償で提供することとなった。そして、国民教育省によって新たに「フランス語入門学力資格試験」Diplôme initial de langue française (DILF) が創設された。『ヨーロッパ言語共通参照枠』に準拠し、その最もやさしいレベルである A1 よりもさらに平易な A1.1 に位置付けられている。滞在許可を得るためには、入国後あるいは入国前の事前研修でフランス語を履修し、このレベルを満たさなければならない。<sup>(注4)</sup> このような研修を指導する教員養成のために、移民入国管理を担うようになった内務省は2011年に「統合のためのフランス語」le français langue d'intégration (FLI) に関する省令を發布し、フランス語政策の枠組みを新設した。外国語としてのフランス語教育 le français langue étrangère (FLE) 教育課程を持つ大学のうち、現在、ロレーヌ大学、パリ＝ナンテール大学、ポー大学、およびリール大学の修士課程に FLI の講座が置かれている。

### 3. フランス・ナント市における外国人学生受け入れ支援

ここからは、フランス共和国のナント市で外国人学生のサポートに様々な形で関わっている各種団体の代表者に対して、筆者が2018年3月に行った聞き取り調査の内容を検討する。

まず、本調査の背景を記しておきたい。筆者が在籍する新潟大学は2009年からナント大学と学生交換交流協定を結び、現在まで毎年最大で5名までの学生を派遣し合っている。<sup>(注5)</sup> 2012年3月からは、日本学生支援機構の学生短期派遣プログラムの支援を受けて、新潟大学から毎回10名程度の学生をナント大学に約3週間派遣する研修旅行をほぼ毎年実施している。研修旅行の企画・運営や学生派遣を通じて、現地で外国人学生を支援するボランティア活動に携わる人々に知り合う機会を得た。とくに、短期研修においては滞在中の学生の宿泊先として一般家庭を頼り、ホームステイという名の居候をさせてもらっている。言葉による意思の疎通もまだまだ難しい外国人の若者を受け入れて生活支援をする人々を支える信念とは何か、ホームステイに関する支援団体の代表者の聞き取り調査から考えてみたい。

#### 3-1. ホストファミリーが所属する仏日文化友好団体「アトランティック・ジャポン Atlantique Japon」<sup>(注6)</sup>

アトランティック・ジャポンは、フランスのナント市を中心に活動するアソシアシオン (association) である。

「アソシアシオン (association)」とは、ボランティア団体などの非営利組織を含む団体で、1901年7月1日の「アソシアシオン契約に関する法律 Loi relative au contrat d'association」によって規定されるものである。金銭的な収益を目的とせず、「二人またはそれ以上の人々が、利益を分かち合うのとは異なる目的において、それぞれの知識や活動を恒常的にともにするという契約」<sup>(注7)</sup> に基づく組織であると定義されている。非営利組織団体というと、日本のNPO法人が思い浮かべられる。両者の違いは、NPO法人は不特定多数の利益に貢献する団体であり、その活動分野も規

定されているのに対して、アソシアシオンは構成員の共益のみを目的にしたものも含まれ、活動範囲にはほとんど制約がない。(注8)

アトランティック・ジャポンは、ナント市およびペイドラロワール地域圏と、日本との交流を目的として1991年から活動を続けており現在会員数は約50組、100名を数える。ナント市役所と連携して日本関連の国際交流に当たっており、国際会議などの公的な会合や日本文化フェアがナントで開かれるときには、市役所の要請を受けて、協会会員が書道や絵画などの作品を展示したり来場者向けのワークショップを開くなどして運営に協力している。日常的には、日本や日本語・日本文化に興味関心を持って入会してくる会員のために、生け花や料理などの日本文化体験講座や日本語教室を開催・運営している。会員の中には日本旅行経験者も多いため、旅行の思い出を語り合う会合を開いたところ好評であったとのことである。日本語を学びたいという希望も多いが、今年度は日本語教室は開講しないことになった。なぜなら、前年度の受講生数が多く授業料収益が上がりすぎたために、講座を担当する教員たちが雇用者と見なされて協会は社会保障費支払いの義務が発生した。それを避けるために教室は解散したということである。

当協会の基本的な活動はナント市役所との連携および会員向けのミーティングが主であり、日本から留学してくる学生に対する支援活動にイニシアティブをとることはない。しかし他団体から要請があれば、ホストファミリーに関心のある会員家庭を募るなどの協力を行なっている。

### 3-2. ホストファミリーのコーディネイトをする2つのボランティア団体

#### (1) 「なんとなく・ナント Association Nantonaku-Nantes ナント日仏支援協会」(注9)

ナント日仏支援協会「なんとなく・ナント」は、2013年10月に設立されたアソシアシオンであり、ナント市に来る日本人留学生を対象に、到着時と帰国時、および滞在中の日常生活における様々なサポートをすることを活動目的としている。ナントへの日本人留学生増加を目指し、主にフランスに学生を派遣している日本の大学や語学学校に対して広報活動を行なっている。また学生サポート活動のほか、日本から学校・自治体などの団体がナント市を訪問する際に、ナント市役所の要請があれば訪問団体に対して同行して、通訳やガイドなど滞在中の支援活動を行うこともある。

当協会設立のきっかけは、2012年に本学短期研修の学生をナント大学に派遣したことに始まる。その際にナント大学学生および一般市民と本学学生との間に交流が生まれ、翌年(2013年)には交換留学生として派遣した本学学生をナント市民がボランティアで面倒をみるようになり、さらに周囲にいる他の日本人留学生たちも彼らを頼るようになっていった。しかし一般市民がサポート活動を行なっていると、役所や銀行などに同行した際に担当者から不審がられることが度重なり、個人ベースで活動することの限界を感じたため、アソシアシオンとしてナント日仏支援協会を立ち上げることにしたと代表は語っている。

留学生の受け入れにかかる支援活動としてあげられているのは、学生のフランス到着前から滞在終了に至るまで、つぎのようなものである。まず到着前には、学籍登録をサポートしたり、滞在費を見積もるための助言を与えるほか、大学寮に入れない私

費留学生の住居探しを手伝うこともある。学生がナントに到着したら、要請があれば駅や空港に出迎えに行き住居へ案内する。さらに、外国人学生として生活を開始するにあたり多種多様な登録手続きが待ち受けているが、頼まれればそれらすべてに同行して面倒をみる。滞在中には、個々の学生の経験に応じて様々な問題が生じることがある。病気になったり盗難に遭ったりすれば、学生を病院や警察に連れて行く。なかには買い物や、休暇中の旅行の予約を手伝ってほしいと頼まれることがある。滞在を終了して帰国する際には、銀行口座や公共インフラの解約、荷物の発送、帰国便の予約、また帰国前に解約手続きが終了しなければ、学生本人が帰国した後でもナントにいる協会メンバーを頼ることができる。日本人学生がなにか困ったことがあれば頼りにできるありがたい存在である。

同協会では学生からの要望に答えるだけでなく、近年ではこれまでの支援経験の中から毎年生じる問題点を検討し、関係各所と連携して未然に防ぐような対策を取っている。一例として、盗難問題対策が挙げられる。毎年、出先でスマートフォンなどを盗まれたり、部屋に盗難に入られたりする学生が後を断たず、その都度、被害届けを提出する学生に付き添って警察に出向いている。昨年度より、警察の協力を得て、学生が渡仏して間もない頃に、警察官から盗難防止の心得を講演してもらいオリエンテーションを開いている。学生にとってはフランスで警察官から直接話を聞ける貴重な機会であり、警察の方でも学生に直接訴えることができ、犯罪防止に役立っているため、双方から非常に好評を得ていると聞いている。

## (2) 「ナント世界の学生交流協会 Association Echanges Nantes Étudiants du Monde (ENEM)」<sup>(注10)</sup>

「ナント世界の学生交流協会 Association Echanges Nantes Étudiants du Monde (ENEM)」は、1972年に設立され、近年まで「外国人学生ホストファミリー協会 Association d'Accueil Familial des Étudiants Étrangers (AFA)」と名乗っていたが改名した。外国人学生に一般家庭を紹介することを目的としたアソシエーションである。当初は数名の外国人学生からの要望によって組織された団体であるが年を経るごとに学生間の口コミによって広まり、2018年現在は約30組の家庭と40人の外国人学生が会員として登録している。

新年度の始め、ナント大学をはじめとするナントに位置する高等教育機関は共通の学籍登録窓口 Guichet Unique を市の中心部にあるナント大学の国際フランコフォニー交流会館 (Maison des Echanges internationaux et de la Francophonie, MEIF) 内に設けており、「ナント世界の学生交流協会」はここにブースを出して新規学生会員を募っている。また常時、協会ホームページ、SNS、および上述の国際フランコフォニー交流会館にチラシを置いて周知を図り、ホストファミリーとなる家族会員と外国人学生会員を募集している。

学生会員には登録する際に連絡先や出身地のほか趣味や好みなどの質問項目のある申請用紙を記入して提出してもらい、家族会員はそれを参考にどの学生にコンタクトを取るか考えることができる。会員になりたいと申し出てくるフランス人家庭は若い人から退職者まで、ファミリーやカップルもいるが一人暮らしの人もいる。協会の理

事がホストファミリー候補の調整を行い、稀に入会希望者の評判を聞いて入会を断ることも過去にあったという。年会費は学生会員2ユーロ、家族会員5ユーロ、以前は無料であったが協会でホームページを開設して以来、その維持費を捻出するため会費を納めてもらっているとのことであった。

家族会員は便宜的に「ホストファミリー」と呼ばれることもあるが、学生を自宅に長期的に住まわせることはしていない。住居を提供する代わりに、学生を定期的に自宅に呼ぶなどしてフランス人家庭と外国人学生との交流をはかる活動を行なっている。家族会員の都合にもよるが、月に1、2回程度、平日かあるいは日曜日に食事に招き、学生とともに家族団欒を行うのが標準的である。場合によっては、学生を郊外や観光地に連れ出すこともあれば、フランスの伝統的な家庭行事に呼ぶこともあり、また単に軽くお茶を飲むだけのこともある。

個々の家庭が自分たちの学生とのつながりを深める活動をそれぞれ行っている一方、協会が全会員を対象に主催する行事もある。フランスでは1月にガレット・デ・ロワと呼ばれる焼き菓子を家族で食べる習慣があり、協会ではこの焼き菓子を食べるパーティを開催して会員同士の親睦を図っている。このほかにも6月にピクニックを2年ほど続けて実施したこともあるが、参加者が少なかったために観光地への小旅行に切り替えたり、試行錯誤しながら会員間の交流の場を維持しようと試みている。

協会理事によれば、学生が求めるものはまず第一に言語技能の向上であり、フランス語の到達度は学生により様々である。そのほか、フランスの生活様式や習慣を身近に知りたいという要望もあり、また家庭料理に対する憧れもある。いずれにせよ、単身、誰も知り合いのいない異国で留学生活を送る学生にとり、家庭の温かみが社会に馴染むのを助けてくれることもあると協会では考えている。

家族会員側の受け入れ動機は、18歳から30歳くらいの若い外国人学生と知り合って友好関係を築きたいというものである。留学生にフランスの生活様式や地元ナントの文化を愛してほしいと感じており、また自分たちも異文化に触れたいと思っている。当協会では自宅に学生を住まわせる活動は推奨していないため、学生を自宅に預かる責任はあまり負いたくないが外国人学生と知り合いたいと考える人々には入会しやすいだろうとのことであった。

協会は、外国人学生およびホストファミリー希望の両者を仲介するために、専従は置かずには現在は5名の理事が全員ボランティアで活動している。

### 3-3. 留学生支援活動にあたる大学生ボランティアクラブ「世界一周 ENS Autour du monde」<sup>(注11)</sup>

「世界一周 ENS Autour du monde」は2002年に設立された大学公認の学生団体で、学生生活課の管理下に置かれている。2017年度は学生ボランティアメンバーは30人ほど、会員は450人。会員は1年更新であり、前年度は活動が活発だったために新規会員も多かったが、ボランティアメンバーも学生であるため入れ替わりがあり運営が安定しないという悩みから、市内に存在する一般の国際ボランティア団体との交流を進めている。

団体の公式な活動としては、まず毎年4月に「多文化の日」を行なっている。学外

の大ホールを借り、20以上の異なる国籍の学生が自分の国とその文化を紹介するものである。インタビューに応じたWeben氏は自身が日本留学経験者ということもあり、出演してくれる日本人学生を探したものの、日本人学生は短期滞在の学生が多く「4月にはすでに帰国している」という理由で出演者を見つけることはできなかった。ほかに定期的に行っているのは10月から5月までの授業期間中に行う「多言語カフェ」という名称の定期的なミーティングで、フランス語と一つの外国語との間で双方向の言葉の学び合いを行うものである。仏伊、仏西、仏中など現在6つの外国語ペア学習グループがあり、まもなくフランス語・アラビア語カフェの開設が予定されているという。仏日カフェは存在していないのだが、その理由は前述のナント仏日支援協会「なんとなく・ナント」が存在するため日本人学生からの支援要請が少なく、そもそもこの団体には日本人学生の会員登録者がいないとのことである。「多文化の日」「多言語カフェ」の他にも不定期で、スポーツ観戦や音楽鑑賞に出かけたり、また国内小旅行が企画されることがある。ワインやチーズなど地域の食文化を知るための食事会も行う。大学寮のレクリエーションルームに集まってのカラオケなど、飾らない小規模の集まりや飲み会も多い。寮でのカラオケパーティーであれば街中に出かける手間もなく気軽に参加でき、外国人学生がまだフランス語での意思疎通が困難でも共通の音楽を介してリラックスした雰囲気の中で気の合う人を見つけることができるというのがWeben氏の意見である。

このボランティアクラブは、ナント大学の学生団体のひとつであると同時に、「国際エラスムス学生ネットワーク International Exchange Erasmus Student Network (ENS)」に加盟しており、ENSのフランス支部であるENS Franceに属するナント支部として位置付けられている。ENSが誕生したのは1989年、欧州域内の大学生のための留学制度「エラスムス」が開始されてまもなく、欧州員会のイニシアティブによりエラスムス学生のネットワークがまずオランダのユトレヒト市で生まれたことに始まる。<sup>(注12)</sup>現在のENSはブリュッセルに本部を置きつつ40の国に広がり、フランス国内には2016年現在、36の地区組織が加盟している。ナント大学の「Autour du Monde」もその一つである。ENSの活動の目的は、受け入れた外国人学生のサポートと、自国学生に留学に関心を持たせることである。

その活動の中核となるのが「バディ・システム」である。外国人学生と地元の学生とをつなげるオンライン・プラットフォームであり、主たる目標は受け入れ学生の到着時の状況を改善し、新しい環境に馴染むのを支援すること、さらに地元の学生が国際交流を通して国際化すること、そして大学や支援協会など地元の関係者が長期的な関係を築けることである。このシステムが生まれたのは2013年、フランス北部のリール市の4名の大学生がエラスムス・プラス・プログラムを終えて帰国した後、リール大学の支援を得て開発したものである。2015年には第2版のプラットフォームが公開され、以来、フランス全国30の都市で、145の国籍、25,000人のユーザーが1万組の「バディ」を生み出している。<sup>(注13)</sup>「Autour du Monde」でも「バディ・システム」を取り入れており、Weben氏もこの活動に団体として最も力を入れていると語っている。同氏は留学でもっとも困難なのは到着時に誰も知り合いがいないこと、友人がいないため学校や地域に溶け込めないことであり、バディシステムを通じて最初の友

達を得てその問題を解決するのだと述べ、彼の団体のスローガンは「誰も一人にしない Pour que personne ne soit tout seul」であると強調した。

#### 4. 考察

フランスのナント市で活動する外国人学生支援に関わる活動を行なっている4つの団体の代表にインタビューを行った。「アトランティック・ジャポン」は積極的に外国人学生のサポートに関わることはないながらも、日本文化に関心のある市民を会員に持ち、日本人学生のホストファミリーを探す学生支援団体と学生の家庭受け入れに意欲のある会員とをつなぐ媒体の役割を勤めている。「なんとなく・ナント」は日本人学生のみを対象に、ナント市および近郊に位置する教育機関で学ぶ日本人学生のいわば生活よろず相談に応じている。時には日本人学生を集めて親睦会を行うこともあるが、むしろ日本人学生との関わりの中心は転出入で発生する各種手続きを円滑に行えるように並走することである。「ナント世界の学生交流協会 (ENEM)」は外国人学生の国籍を限定せず、留学生との交流を望む市民と学生との縁を取り結んでいる。「世界一周」はフランス人学生が新入り外国人学生の面倒を見る「パディ・システム」を取り入れた学生同士の交流会である。「なんとなく・ナント」は留学手続きに関わるサポートに力を入れ、「ナント世界の学生交流協会」と「世界一周」は留学中の人間関係に関わるサポートを行なっていると見えよう。「アトランティック・ジャポン」も広い意味で日本人学生の人間関係支援の役割を果たしていると言えるかもしれない。

これらの団体に共通しているのは、代表や理事が外国出身者であったり外国滞在経験があることである。「アトランティック・ジャポン」の代表は日本出身者であり、「なんとなく・ナント」代表は日本長期滞在経験がある。「ナント世界の学生交流協会」理事のDanielはポーランドの出身であり、もうひとりのCamilleは高校時代にアメリカ留学の経験がある。「世界一周」の副代表は上述のように日本に交換留学している。Camilleはインタビューに答えてこう述べている。(注14)

「自分自身10年前、アメリカに高校留学の経験があるので、学生にとって外国暮らしが楽じゃないことは知っています。親しいと感じられる人がいたらいいでしょうし、私たちの協会があるのもまさにそのためです」

人間関係のサポートを行なっているとした二つの団体「ナント世界の学生交流協会」と「世界一周」がどちらも、「家庭の温かみ」や「最初の友達」が外国人学生の社会順応の助けになるという趣旨のことを述べていることも考え合わせると、同種の体験をしたことから生まれる共感が到着したばかりの外国人支援活動に従事する動機付けになっているものと考えられる。(注15)

#### 5. まとめ

留学生支援には、渡航前、個々の学生が留学先を検討する時点から始まる。留学先を検討して決定するための情報を適切に開示提供する必要がある。そこに含まれる情報には、習得できる学位やカリキュラム、研究内容など学術面にかかる情報はもちろ



ん、宿泊先、物価などの生活情報も検討事項として重要であろうし、渡仏が決まればビザの取得など渡航前登録にかかる情報が必要である。在学開始直後には学術、学生生活、市民生活など様々なオリエンテーションが欠かせないであろうし、また渡航後の各種登録手続きを行わなければならないため同伴支援があることが望ましい。オリエンテーション期間が過ぎると、新しい環境に慣れて学業の他に課外活動に参加したいと思う学生が出て来るかもしれないし、また逆に次第に体調を崩す学生も出るだろう。学生が自分の欲求を相談できる支援団体や支援者がいるのが好ましい。環境によっては、学生に対する経済支援として、ティーチングアシスタントなどのアルバイトや奨学金の紹介ができるだろう。さらに、在籍期間終了後を見据えたキャリア支援、進学相談なども、在学中のいずれかの時期に行われれば有益であろう。移動にかかる手続きに際し、信頼できて親身に並走してくれる機関があれば、渡航する側にとっては大きな安心材料となり、海外留学に踏み切るためにもプラスになるものと思われる。

さらに渡航後の環境にいかに関わり込んで、精神的な安定を保ちつつ多くを学んで成果をあげるか、本人にとって充実した留学生生活を送れるかには、現地で知り合う友人知人との良好な関係が重要な要因として関わっているであろう。

外国人学生を支援する人々は、自らも現在暮らしている社会の外側で暮らした経験を持ち、外側からやってくる外国人学生に対して自分の体験と照らし合わせて、彼らに救いの手を差し伸べようとしているのではないだろうか。日仏間の学生交換はますます盛んになっていくものと予想されるが、<sup>(注16)</sup> 現地支援者の助けを得て留学中の困難を乗り越えた学生たちが、そうした体験を将来自らも支援者となる動機付けに昇華させていくことと期待される。

## 注

(注1) 総務省行政評価局「グローバル人材育成の推進に関する政策評価書」平成29年4月

(注2) オーストラリア留学のメリットとしては、2011年までは永住権申請における優遇措置があった。しかし2011年に発表された「留学生ビザの戦略的見直し」によって2012年にその優遇措置が廃止され、留学生からの不満の声が高まった。それを受けて、政府は別の面でオーストラリア留学の付加価値を高めるための政策を打ち出すことになり、注目されたのが留学生の Employability（雇用可能性）である。留学生の出身地における労働市場において、留学者の増加により、留学経験・学位の価値が下がっていることに危機意識を持ち、留学後の雇用可能性を高めるための教育方策を提起している。つまり、以前は永住権獲得であった留学のメリットを、雇用可能性にシフトさせた教育方策を念頭に留学政策を進めている。

(注3) 西山（2018）によれば、フランスの移民政策は時代を追って「同化」assimilation、「編入」insertion、「統合」intégration に分けることができる。まず、個人がフランス社会に全く溶け込む「同化」政策が推し進められたが、1980年代半ばには多文化主義を背景にした「編入」が推奨され、1990年代

- 以降は「統合」が謳われている。「統合」とは、個人の出身文化を保持しながらホスト社会に参画することを意味する。西山 (2018) pp.106-107
- (注4) 外国人が入国後、フランス語能力が基準に達しないからという理由で滞在許可を認めないなどの制裁措置は、欧州人権条約に違反する恐れが指摘され、むしろ入国前の事前研修で不合格者を選び分ける方策が取られている。西山 (2018) p.124
- (注5) 2009年に新潟大学人文学部および大学院現代社会文化研究科がナント大学と協定を締結してナント大学から人文学部に2名の学生を受け入れ、その2年後に全学協定に移行した。
- (注6) 2018年3月、同会会長である沼口久美子氏にお話を伺った。
- (注7) 福井憲彦 編『アソシアシオンで読み解くフランス史』山川出版社、2006年、p.5
- (注8) 諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究実行委員会「諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究報告書」、2007年、pp.174-175
- (注9) 2018年3月、同会会長であるDidier Roux氏にお話を伺った。
- (注10) 2018年3月21日午後6時からナント市内、同会会長のDanièle Guédon、および理事のDanielならびにCamilleの三氏にお話を伺った。
- (注11) 2018年3月24日、同会副会長のAdrien Weben氏にお話を伺った。
- (注12) ENS France <http://www.ixesn.fr/erasmus-student-network> 2018年09月18日閲覧
- (注13) ENS France <http://ixesn.fr/buddysystem> 2018年09月18日閲覧
- (注14) インタビューでは話し手の許可を得て録音し、音声を元に筆者が日本語に訳した。
- (注15) その他、退職して時間ができたことも物理的要因として重要であろうと思われた。また、キリスト教的な慈善精神も活動を支える信念の中に生きているのではと考えている。本稿で取り上げたインタビュー以外にも、ナントで何組かのホストファミリーに話を聞いているのだが、その中で「中東からの難民を自宅に一時的に住ませたことがある」と語る家族があった。本稿の協力を依頼した「ナント世界の学生交流協会」の理事も「メキシコ人の養子がいる」と話していた。
- (注16) 日仏間の学位・単位の相互認証協定が2015年5月5日に調印された。それ以前は双方の教育制度が異なるため、入学に求められる資格や卒業して得られる資格が他方の国の何に相当するのか判断する基準が存在しなかった。

## 参考文献

- 佐藤由利子「オーストラリアにおける戦略的留学生支援—学生エンゲージメントの重視と就職支援の課題—」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』第4号、pp.29-38、2018年
- 諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究実行委員会「諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究報告書」文部科学省委託研究、2007年
- 清野 慎「フランスにおける姉妹交流とアソシアシオン」『自治体国際化フォーラム』特集：フランスにおける諸問題への取り組み、228号、pp. 2-7、2008年
- 高橋 彩「Ⅱ. イギリスにおける留学生支援：支援の現場から考える」『北海道大学留学生センター紀要 = Journal of International Student Center, Hokkaido University』【特集】留学生支援の枠組みを考える、16: 6-17、2012年
- 西山教行「フランス語による移民の統合とは何か—フランスにおける成人移民の言語教育政策の変遷と課題」松岡洋子・足立祐子『アジア・欧州の移民をめぐる言語政策—ことばができればすべては解決するか?』ココ出版、pp.102-133、2018年
- 福井憲彦 編『アソシアシオンで読み解くフランス史』山川出版社、2006年
- Firkola, Peter「Ⅲ. カナダの大学における留学生のキャリア支援」『北海道大学留学生センター紀要 = Journal of International Student Center, Hokkaido University』【特集】留学生支援の枠組みを考える、16: 18-28、2012年

## 参考URL

- Atlantic Japon <http://atlantique-japon.fr/> (2018/09/18 閲覧)
- ESN Nantes - Autour du Monde <http://www.univ-nantes.fr/esn-nantes-autour-du-monde--302736.kjsp?RH=1213173865369> (2018/09/18 閲覧)
- Echanges Nantes Étudiants du Monde (ENEM) <http://asso-enem.fr/fr/envie-de-participer> (2018/09/18 閲覧)
- International Exchange Erasmus Student Network France <http://ixesn.fr/> (2018/09/18 閲覧)
- Nantonaku Nantes <http://nantonaku-nantes.jp/Wordpress/fr/accueil/> (2018/09/18 閲覧)